

ご挨拶

校長 早坂重行

博士(教育情報学)



校長の早坂重行と申します。PTA総会でも申し上げましたが、本校の同窓(高37回)で、以前にも9年ほど勤務しておりました。男子校時代に、一年から3年の担任をふたまわりした後、男女共学化3年目の年に学年主任となり卒業生を送り出すことができました。また、6年前、息子も本校でお世話になり、私自身、硬式野球部の親の会の会長をしていたこともあります。そして、今年度から再び、校長としての勤務となりました。生徒、教師・保護者、そして管理職としての仙台二高との関わりということになるのでしょうか。

以前に勤務をしていた時の話です。1年生を担当し、ハンドボール部の顧問をしていた際に、ひとりの保護者からお電話がありました。「(息子が)入部したばかりで練習がきつく、家に帰ってくる」と脚がパンパンに張っている。本人は頑張っているのだが、このままではもつか、心配です」というお話でした。それから、「この電話のことは息子には黙っていてほしい」ということでした。私は、「今

切った自信を得ることができました。いつもこのようにうまくいくわけではありませんでしたが、学校とご家庭との連携で、このように生徒が成長できたことは嬉しいことでした。C君はその後、レギュラーとして活躍し、第一希望の大学に合格しました。

が一番大変な時ですね。勉強もありませんから。C君は、勉強も頑張っていますからね。お話されたことはわかりました。家での様子を教えていただき、ありがとうございます。もちろん、このこと(母親から顧問に電話があったこと)はC君には話しません」とお答えしました。そこで私は1年生の練習の質と量を検討し、強弱をつけながら適度に休みも増やしました。その後、C君は、勉強と部活のスタートの大変な時期を乗り越えることができ、本人も自分で乗り

ロシアの心理学者にヴィゴツキー、L.S.(1896～1934)がいます。一般には、「発達の最近接領域」で有名です。ヴィゴツキーはこんな実験をしました。二人の子どもをテストし、二人とも知能年齢が八歳だったとします。この子どもたちに八歳より上の年齢のテストを与え、解答の過程で誘導的な質問やヒントを出して、助けてやります。すると、一人は十二歳までの問題を解き、別の子どもは九歳までの問題しか解けないということがわかりました。

師と生徒との「かわり」方がやはり大事なのだなあと、痛感しております。高校生を目の前にして、われわれ大人である教師や保護者の方々は、どのようにかわるべきでしょうか。時には寄り添ったり、時には距離を置いたり、「塩梅」が難しいところだと思えます。

われわれ教師は、生徒をよく見て、保護者の皆様と情報を共有しながら、一緒になって、生徒の「発達の最近接領域」に働きかけ、生徒の学びの充実、そして成長にかかわっていきたくと考えております。どうぞよろしくお願いいたします。

他人の助けを借りて、子どもがなし得ることは、明日には一人で行えるようになる可能性があります。私は、この実験結果の大事なところは、子どもに対する大人の「かわり」方だと思えます。教師を30年以上(教育委員会事務局、管理職も含めて)続けてきて、教

師と生徒との「かわり」方がやはり大事なのだなあと、痛感しております。高校生を目の前にして、われわれ大人である教師や保護者の方々は、どのようにかわるべきでしょうか。時には寄り添ったり、時には距離を置いたり、「塩梅」が難しいところだと思えます。

